「おおいた教育の日」エッセー
「一般の部」大分県教育の日推進会議会長賞（最優秀賞）
テーマ：おおいたの子どもたちへ

「おおいたの子どもたちへ」

豊後高田市　　井上　杉夫

今年の全国高校野球選手権大会、沖縄県代表の興南高校が沖縄県勢として初めて優勝し春夏連覇の偉業を達成した。決勝戦の放映中に興南のキャプテン我如古（がねこ）君の小学校の卒業文集が紹介された。そこには「努力」「自信」「信頼」「夢」「甲子園」「必勝」と書かれていた。小学生の書いた作文を見て、私は思わず「すごい」そして「かっこいい」と唸っていた。自分が小学生の頃、どれだけ夢中になって追いかけられるものがあっただろうか。勿論私だけでなく、多くの高校野球ファンがこのエピソードに触れたことだろう。しかし、私は我如古君と同じ年代の子供達に、この言葉を噛みしめてもらいたい。ゲームやインターネットが遊びの主流になりつつあり、見かけの格好良さがもてはやされるこの頃、歯を食いしばって頑張り、勝てば達成感の、負ければ悔しさの涙を流す。そんな一途さが人の生活から失われているような気がする。子供の頃、宿題をやろうとしている時に母から「宿題はやったんかい」と怒られると「今やろうと思っとったんに」と、途端にやる気がなくなったことはないだろうか。外見上は同じ行動に見えても、人からやらされていると思いながらやるのと自分の意思でやるのとでは、結果は全く違ってくる。それは、自らの「努力」が「自信」や「信頼」を生んでくれるからである。そして、「努力」できるのは、はっきりとした「夢」や「目標」があるからなのだ。では、「甲子園」の「必勝」（優勝）を目指した我如古君達、興南の選手がどんな「努力」をしたか。それは、我喜屋（がきや）監督がおっしゃっていた。「小さな事を毎日コツコツと確実に積み上げること」だと。それこそが「夢」を叶える唯一の方法なんだと思う。

しかし、毎日コツコツと努力することは、口で言うほど簡単ではない。簡単ではないからこそ、それができたことは揺るぎない自信になり、周りからの信頼につながる。どうせこの世に生まれたからには、自信を持ち、胸を張って生きていこう。

夢に向かって努力することの他に、人として持っていて欲しいものは、他人を思いやる心である。大人になってどんな職業に就こうが、無人島で生活するのでなければ、人は他人との関わりなくして生活することはできない。いつの頃からか、日本人は、思いやりや連帯感よりも個人の権利や自由を主張するようになってきた。それが、自分さえよければそれでいいといった考え方や、他人が困っていても見て見ぬふりをするといった行動に表れるようになってきた。

２００２年のワールドカップサッカーで、カメルーンのキャンプ地となった（旧）日田郡中津江村。あの時、予定より何日も遅れ、しかも真夜中に着いた選手をそれこそ村中で暖かく迎えたことで日本中が中津江村フィーバーに沸いた。しかし、当の村民は、そんなに騒がれるようなことをしているとは誰も思っていない。はるばる地球の反対側から何日もかけて来てくれたお客さんを暖かく迎えるのは当然のことなのだ。その当然のことが当然に見えない寂しい環境に生活していることを知って欲しい。これからの人生では、仕事のうえでもプライベートでも、さまざまな困難やトラブルが待っている。その中には自分の経験や頑張りだけではどうしても解決できないこともあるだろう。そんな、人の助けが必要な時が必ず来るのだ。その時、自分勝手な生き方をしてきた人間に、あなたなら助けの手を差し伸べるだろうか。そう考えた時、人は決して自分本位に生きてはならないことが理解できると思う。思いやりを持って、時には優しく時には厳しく接することが、人として生きるために大切なことなのだ。そして、そうした君たちの生き方から、私たち大人もちゃんと学ばねばならない。いっしょに、そんな社会を作って行こう。

「おおいた教育の日」エッセー
「一般の部」優秀賞

テーマ：おおいたの子どもたちへ

「生きる希望を見つけて」

日出町　　楠　　智恵

今､いじめや不登校などで悩みを抱えた子供たちの自殺がニュースなどでも取り上げられています。自分の命を自ら絶つだけではなく、相手に矢を向けるケースもあります。私は、その原因の一つは、家族や友達とのコミュニケーションの不足が挙げられると考えます。

まず、家庭の中で両親や兄弟、祖父母など一緒に暮らしている家族との会話は十分にあるでしょうか。例えば、学校から帰宅して、皆で夕食を食べる時に、今日あった出来事などを互いに話したり、夕食のメニューの感想などを述べたり、会話は、ちょっとした事から、見つけることができます。家庭の中で十分な会話が足りていると子供たちの心も安心し、満たされると私は思います。

私も学生の頃は、ただ両親が話を聞いてくれるだけで嬉しかったものです。部活などで運動部に入っていたこともあり、その厳しさや自分の自信のなさに悩んでいた時は、母から一言､「でも智恵は、あきらめずに頑張っているじゃない。お母さんエライと思うよ。」と言われた時は、涙が出そうなくらいに嬉しかったことを覚えています。子供ってとっても単純なのです。ただ共感してくれる、ただうなずいて話を聞いてくれる、それだけで、とても心が落ち着くのです。でも逆に、自分の考えを否定されると、どうして良いのか分からなくなり、自分の思いを、まっすぐに伝えることができなくなってしまったり､心をふさいでしまったり､思春期の子供たちは特にそうだと思います。子供だって、一生懸命、考えて、親に何かを伝えようとしています。私は、その思いを一度、受け止めて、最後までじっくり話を聞いて、その上でアドバイスをしたり、私はこう思うよ、など考えを述べるなど話を聞く姿勢も大事だと思うのです。そうすることで、家族の絆は、もっともっと深まっていくと思います。

私は今から５年ほど前に、自殺で友人を亡くしました。その何日か前に会って話をしていたので突然のことにショックを隠しきれませんでした。その友人は職場での人間関係に悩んでいたそうです。心が優しく繊細だった彼だけに、一人で思い悩み、苦しんでいたことに、どうして気付いてあげられなかったのだろうと、私もひどく落ち込みました。

未来を担う若い世代の人々の自殺が絶えない、今の世の中。私たちは、どう向き合っていけば良いのでしょうか。

社会人３年目になる私も、人間関係で悩んだこともありました。でも人と関わっていくことは、生きていく上でかかせないものです。人と関わっていくから苦しいし、楽しいと思えるのです。長い長い人生。十代、二十代、三十代と、良い時もあれば、悪い時もあります。でも私は子供たちに伝えたい。今日とても悪い事があって、消えてしまいたいと思った時、もう一日だけ待って、明日を生きてみて！そこにはきっと昨日とは違う別のあなたがいるから。一日たてば、人の心もずい分と変わるものです。あれだけ涙を流し、落ち込んでいたのに、次の日はケロリと笑顔でいられたり。人生、何があるか本当に分からないものなんです。

いじめや不登校で悩んでいる小・中学生も数多くいると思います。そんな時、あなたには誰か一人でも心の支えになる人や物を見つけてほしいと思います。実在する人じゃなくても良いのです。マンガの中の主人公でも良い。あるいは、テレビドラマのヒロイン。自分が飼っているペット。大切にしているぬいぐるみ。何でも良いから、あなたが元気を取り戻せる大切なものを見つけてほしい。それはきっと生きる希望となってゆくから・・・

私は大人になった今でも子供のように泣いてしまう日があります。でもそんな日があるから、後になって、笑って話せる素敵な思い出になっていくのです。どうか自分自身の弱い心に負けないで今を生きていって下さい。

「おおいた教育の日」エッセー
「一般の部」優秀賞

テーマ：おおいたの子どもたちへ

「地域を愛し、地域に愛される子に育って欲しい」

大分市　　竹永　祐子

「人は人の中で生き、人の中で成長する」
地域の顔の見える関係の中で、他年齢層そしてより多くの人から愛情をかけられ影響を受け、子どもたちは心身共に健やかに育つそう信じている。

近年、人間関係の希薄化、コミュニケーション不足により社会性の乏しい若者や心病む子どもたちも増え問題となっている。なぜ、そうなってしまったのか。それは一概に家庭や学校の問題ではおさまらない。地域との交流の希薄化にも一因はあると思う。

今こそ、家庭･学校･地域協働の子育て、「地域の子どもは地域で育てる」といった意識や子どもが地域に溶け込む必要性を感じる。

私の住むこの地域でも、以前はご近所づきあいが盛んであり夏には夕方から祭りのお囃子と共に老若男女問わず集まり、伝統の盆踊りを楽しんでいたという。

今ではとても考えられない風景である。

しかし､まさにそのような風景が子どもたちと地域との結びつきを深めていたのではないかと思う。

私は、地域の方々とのふれあいを大切にし、子どもにも住んでいる地域を好きになって欲しい。その想いから地域の行事、祭りには必ずと言っていいほど子どもと共に参加している。おかげで、親子共々地域の方々と顔見知りになりかわいがっていただいている。

わが地域には数々の伝統行事があり、地域の方々と共に子ども達は行事を盛り上げている。その一つである 400 年もの歴史をもつ国選無形民俗文化財の伝統の盆踊りが毎年夏の暑い時期に盛大に催されている。私は子どもと共に踊り子としてその踊りの大会に今年初めて参加した。

踊り手の子どもたちは、大会が近づくと公民館に自然と集まり、毎晩地域の方に指導を受け、にぎやかに踊りの練習をする。時には、悪ふざけ、おしゃべりをして真面目に踊らない子がいると、おじちゃんの「お前たちしっかり踊らんか！」の一撃が飛ぶ。子どもたちは、一瞬ビシッと締りまた踊りの練習に励む。練習が終わると「よくがんばったね。さあごほうびよ」とジュースやアイスがふるまわれる。子どもたちは疲れを忘れて大はしゃぎする。

踊りの当日は、皆きれいにお化粧をし、きらびやかな衣装を身にまとい、地域の方々から「かわいいよ」「かっこいいね」と声をかけてもらい照れくさそうに笑顔で喜ぶ姿がみられた。

何とも心温まる微笑ましい光景である。

また子どもたちは暑さと疲れに耐え、２時間という長丁場を踊りぬき祭りを盛り上げる。

「なぜ踊りに参加しているのですか」とのＴＶインタビューに対し、みな「楽しいから」「みんなに踊りを見てもらいたいから」時には、「おじいちゃんやお父さんが踊りが上手なので私も上手に踊りたいです」と代々この踊りを受け継いでいる言葉も聞かれた。

子どもたちの祭りを楽しもう、盛り上げようという気持ちにも心強くうたれ感動した。

この盆踊りは、地域と子どもたちをつなぐ架け橋ともなっている。地域の高齢者や祖父母世代は、この優雅な舞を毎年楽しみにしている。若かりし頃はきっと自分も踊り子となり祭りを盛り上げていただろう。今は世代が変わり指導者、お世話役となり私達親子に伝統を伝えてくれている。とても感謝すべきことである。

子どもたちは、このような温かい地域の中で、たくさんの人に見守られ愛され育っている。地域の方のおかげで健やかに成長していることに感謝の気持ちをもって欲しい。

そして、伝統行事を守り盛り上げることこそが、地域の方々への恩返しにもなりうる。将来はこのよき伝統文化を支える後継人になってくれることを期待する。

わが子のみでなく地域の子どもたちみんなが、地域の方々に愛されながら健やかに成長してくれることを願う。

「おおいた教育の日」エッセー
「小・中・高等学校・大学等の部」大分県教育の日推進会議会長賞（最優秀賞）
テーマ：わたしの心に残ること

「わたしの心に残ること」

大分県立佐伯鶴城高等学校２年　吉田　月菜

現代の社会は、便利な物に溢れ、多様化した機能で私たちの生活を豊かにしている。しかし、それらを使う者にはマナーが必要である。例えば、電車の中で携帯電話を使用することや大音量で音楽を聴くことなどは、周囲の迷惑になる。私が実際に目にして問題だと思ったのは、歩道の点字ブロック上に停めている自転車である。それを見てとても不快だった。目の不自由な人のことを何も考えていない行動に憤慨した。「なぜもう少し別の場所へ移動させることができなかったのか」と。自転車を停める時に場所を考えて停めることは、ほんの数秒時間をとるだけの小さな思いやりである。しかし、その数秒を惜しむことで、目の不自由な人がその自転車にぶつかり、こけてしまうこともあるのだ。そうなると倒れた自転車を立て直すにはとても時間がかかるし、打ち所が悪ければ一生残る傷になるだろう。そんなことも考えずに停めるのは、最低の行為だと感じた。しかし、本当に反省すべきは、私自身だったのである。このように考えるようになったのは、ある出来事からだ。

私の父は頑固で、よく言えば意志の強い人である。自分の正しいと思ったことは、誰に何を言われようと考えを変えることはない。常に自分の行動に自信を持っているようで、それが私にはとてもうっとうしかった。すべて自分が正しいかのように説教をする父が嫌いだったのだ。そんな父と、たまたま電車に乗っていた時の話である。その電車の中には十数人の乗客がいて、席はまばらに空いていた。父と私は、手すりに掴まって立っていたが、電車の揺れは大きく、手すりがなければ転びそうだった。そこに白い杖を持った一人の男性が乗車してきて、ドアのすぐ前で立っていた。私は白い杖が、目が不自由であることを意味していると知っていたので、手を貸すべきかどうしようかと悩んだ。目の見える私たちでも手すりに掴まっているのがやっとなのに、目が不自由な人が転ばずに立っているのは難しいはずだ。そう思いながら周りを見てみると、見て見ぬふりをする人や、ちらちらと男性を見ている人もいた。みんなその男性が目が不自由であることに気付いているようだったが、誰一人動こうとしなかった。すると私の横にいた父がすぐに男性の所へ行き、声をかけた。男性はにっこりと笑って、父に手を引かれながら空いていた席に座った。戻ってきた父に、私がさっき考えていたことを伝えると、「思うことと、実際に行動することとは違う。行動しなければ、思っていないのと同じだ。後悔する前に行動に移せ」と言われた。父の言葉を聞きながら、ふと男性の方を見ると、さっき男性を見ていた人がその横に座って、腕を掴んで支えていた。一人が行動することによって、周りが変わったのだ。

この時「思うことと行動することの勇気は別であること」、「まず自分が行動することで周りが変わること」を実感として知った。更に私は点字ブロック上に置かれた自転車のことを思い出した。あの時、私は不快には思っていたものの、何も行動に移さなかった。その自転車を見ていながら何もせずに通り過ぎたのは、目の不自由な人のことを考えていないのと同じではないか。あの時、私にできることがあったはずである。「もう後悔したくない。」と思った私は「したほうがよいと思ったこと」や「迷ったこと」はやってみようと決心した。

私はこの時から、行動することの価値を言葉ではなく、自らの行動で伝えてくれた父を尊敬するようになった。私も父のように行動できる人になりたい。そうすれば自分に自信が持て、人の行動を不快に思う時間も減り、私の心は平和だろう。『文明は進化していく。しかし、便利な機器は、人間のモラルの下で使われなければ凶器と同じになる。』とどこかで読んだが、今はこのことが実感として分かる。

「思いやりのある行動」の価値が、一人でも多くの人に伝わればと思い、この時の体験を「書く」という行動に移した私である。

「おおいた教育の日」エッセー

「小・中・高等学校・大学等の部」優秀賞

テーマ：わたしの心に残ること

「みんなと一緒に」

日出町立日出小学校６年　　須股　凜

「どう思う。」と母が尋ねたのは、「オタマジャクシのうんどうかい」という本のことだった。私もその本は読んだことがあった。しっぽの短いタマのためにクラスの友達が話し合い、タマだけ泳ぐ距離を半分にしたのに、運動会当日、タマは友達が来るのを待って泳ぎ始めてしまった。私は、母に、「母さんこそどう思うの。」と尋ねてみた。母は、「タマのために考えてあげたつもりが、タマを傷つけてしまったのかな。」と答えた。私は、自分がタマや友達だったらどうするかなと迷った。

この春、家の金魚が卵を産んだ。小さな赤ちゃんがたくさん孵化したが、育てるのが難しくどんどん死んでしまった。最後に十二匹の赤ちゃんが残り、私は大きな水槽に入れて一生けん命世話をすることにした。

最初は、よく見ないと見つけられないほど小さな赤ちゃんたちだったのに、どんどん体の大きさに差が出始めた。もう、めだかほどになっている金魚もいるのに、まだ３ミリメートルしかないチビが一匹いた。私は、だいじょうぶかなと少し心配になった。えさをやると大きくなった金魚たちはパクパクよく食べる。泳ぐのもスイスイ速くて、水槽をいばって泳ぎ回っているような気がした。それに比べて、チビは水草の中にいつもかくれている。いつもいる場所が決まっていて、水草の葉の上にそっと体を休めているように見えた。私は、チビを応援したくなった。えさをチビの近くにまいたり、他の金魚がいじわるをしていないか見張ったりした。でも、チビはなかなか大きくならず、体の差は開くばかりだった。

ある日、いつもの水草の辺りを見るとチビがいない。水槽の中をあわてて捜すと、大きくなった金魚たちに交じって泳ぐチビがいた。体の大きさはずい分違ったが、一緒に泳いでいるように見えた。大きい金魚たちもいじわるはしていない。いつも水草の陰にじっとしていたチビが広い場所を泳いでいたのを見て私は自分のことのようにうれしくなった。

みんなと一緒に泳ぎ回るチビを見て、私は母の話を思い出した。あの時、タマはみんなと同じことをしたかったんだとわかった。タマにとっては、順位なんか関係なかったんだ。タマも、うちのチビも、「みんなと一緒に泳ぎたい」という夢をもってがんばっていた。それなのに私は、体が小さいからとか大きいからで弱いとか強いとかを判断していた。チビを応援していた私や、タマのことを思って相談したクラスの友達は、まちがってはいなかったけど、最初から「かわいそう」とか「できない」と思ってしまうのはちがっていたかもしれない。

「タマは、友達の気持ちをわかっているよ。友達もタマの気持ちがわかったと思うな。そして、私がタマなら、『みんなと一緒に泳ぎたいんだ。一生けん命がんばるよ。』と友達に伝えるよ。」
と、私は母に話してみようと思う。

「おおいた教育の日」エッセー

「小・中・高等学校・大学等の部」優秀賞

テーマ：わたしの心に残ること

「人の手のぬくもり」

佐伯市立佐伯城南中学校３年　　赤峰　希美

人の手の温かさを感じるとほっとします。

私は、時々、仕事で疲れて座っている母の背中にそっと掌をあててみます。

「のんちゃんの手は温かいなあ。服の上からなのに手の温かさがじんわりと伝わってくるなあ。なんだか落ち着くんだわ。」

母は目を細めて気持ちよさそうにしています。

そして、母の背中からも私の掌に温かいものがゆっくり上がってきて、ほわっと眠たいような気持ちになります。ちょうどお互いの体温とやさしい気持ちが私の手を介して、行ったり来たりするようです。そう言えば、昔の人は、病気やけがを人の手の力で治すと信じていたという話を聞いたことがあります。

私がこんな手の力を意識するようになったのは近頃のことです。でも、手の温かさがこんなに人の心を穏やかにするということは、既に小さい頃から知っていたのだろうと思います。

私が赤ちゃんだった頃、祖父は、足がしびれて痛いのを我慢しながらも気持ちよさそうに眠っている私を起こさないように、ひざの上に抱いていたそうです。その時の私は、たぶん祖父の手のぬくもり、ひざの温かさを感じて、安心していたのだと思います。

手の温かさといえば、祖母の作ってくれるおいしいおむすびがあります。おむすびは、特別に変わったところもない、真っ白のおむすびです。でも、祖母のおむすびは、他の人が作るおむすびとは何か違います。口の中に入れると、ふわっとしているけれど、米の一粒一粒が舌の先にはっきりと感じられる不思議に力がわいてくるようなおむすびです。そばで一緒におむすびをほおばっていた弟が、

「おばあちゃんのおむすびって、どうしてこんんなにおいしいのかな。」と聞きます。祖母はすかさず、

「それはね、おいしくなあれ、おいしくなあれって言いながら作るからだよ。」

と、笑いながら答えます。きっと、おいしいものを食べさせたいという気持ちが掌にぎゅっとこめられているからでしょう。

手の温かさは、人の心をほどいてくれます。

安心させてくれます。私は、生まれてからずっとまわりの人の手の温かさに包まれて、育ってきたのだと思います。最近、新聞やニュースでたくさんの、悲しい出来事、痛ましい事件を見聞きするにつけ、もし、この手の温かさを感じることができれば、伝えることができたら、と思います。手の温かさを人と人とがお互いに感じることができれば幸せになれるのに、前に進むこともできるのに。私は、生まれたこの家で手の温かさという大切なものをもらえたことをありがたく思います。

「おおいた教育の日」エッセー
「小・中・高等学校・大学等の部」優秀賞
テーマ：わたしの心に残ること

「三十年の十月」

大分大学教育福祉科学部４年　　見藤　素子

十月の其の日、朝地の山奥の会場に、全ての準備を終えた私達は立っていた。所属するゼミの教授である佐脇健一氏の初個展の二日前。数名で最後の搬入と設置を行っていた。風化した建造物や懐かしい風景を思わせる彫刻作品群、その全てが完璧な計算の上に配置され作り出された空間の中で、私は誰にも気付かれないよう、声を殺して、泣いた。

私が佐脇教授の作品や考え方に共鳴と深い感動を覚え、佐脇教授の許(もと)で美術を学ぶことを決意し大分へとやって来てから、もう四年が経つ。入学した当初、誰かが言った。「大学は遊ぶところ。適当にやれば良い。」馬鹿な事を言う、大学は勉強する所だぞ。自分は決して現(うつつ)を抜かすまいと誓った。佐脇教授から最初に忠告されたのは「流されるなよ。」ということであった。

しかし、大学では毎日目紛(めまぐる)しく様々なことが起き、現を抜かすまいと誓った筈(はず)の私は目の前の楽しい誘惑や苦しい心配事に、気が付かない内に流されて行ったのであった。制作する作品も混迷を極め、良いものではなくなった。何の為に創るのか、此れが私の望んだ事なのか。芸術とは、何の為にある筈だったのか。制作スペースとする場所でふと足許を見渡せば、薄っぺらな制作の痕跡が脈絡無く散逸している有様である。伝えたいものも伝わらず、泣いているかのような瀕死の其れが、一様に私の慢心と怠惰を指し示す。「まるでゴミのようだ。」口にこそ出さなかったが、胸の内で呟いた。

三年生になった頃、其の年の秋に開催されると謂(い)う佐脇教授の個展の準備を手伝わせて頂く事となった。三十年に亘り教員を務めて来られた佐脇教授は此れが初めての個展であり、また、其の個展の計画は何年も前から為されているものであった。準備を手伝う内に、佐脇教授が六十年の人生の中で只管(ひたすら)追い求め大事にしてきたものが何であるかに触れ、その重みに慄然とした。三十年。その間、流される事無く積み重ねられてきた確かな技術と、確固たる意志、自らの哲学。真に芸術を愛すること、向かい合う事がどういう事か。其の粋である作品達は恐ろしいまでに美しく、温かかった。人の心の根源に触れるようであり、そして、会場の大きな空間そのものを「佐脇健一の作品」と成していた。個展は大成功を収め、全国から観覧者が集まった。其の間、私は盗めるだけの技術を盗ませて頂き、学べるだけの心を学ばせて頂いた。言葉は深く耳を打ち、己の甘さを思い知らされた。此の機会を逃してしまったら、もう一生取り返しがつかないだろうと自分で分かっていた。

嘗(かつ)て佐脇教授から怒られたことがある。「ハッタリだけの作品を作ったとしても、其れを誰かが貰ったとして、其の人は喜ぶと思うか？心を込めて作った作品は其れだけで人の心を打ち、ギャラリー一つの空間だって支配する。君はそんな作品を作る為に態々(わざわざ)こんな場所までやって来たんじゃなかったのか？もう、自分が自分が、と言っている段階は疾(と)っくに過ぎた。一番大事なことが何であるかを忘れるな。そして、美術を「学ぶ」と決めた以上、社会や文化の文脈を作り上げていく一員であるという自覚と責任を忘れるな。」、と。

其の言葉を思い出しながら、私は佐脇教授が心を込めて作ってきた作品を見て泣いていた。上手く言葉には出来ない。しかし、やっと「わかった」ことが嬉しくて仕方なかった。

翌日、学校の制作スペースの片付けを行った。散乱する瀕死の作品達を仕舞っていく。胸中で改めて己を恥じ、全てに詫びた。流されず、大事にするものの重み。学ぶことの有難み。忘れかけていた其れを、今一度思い出さねばならない。何の為にものを創るのか。芸術は何の為にあるのか。三十年後までに、私はきちんと責任を持って、心を打つ作品を作れるだろうか。想いを馳せながら、絵の具を入れた箱の引き出しを開けた。

中に入っていたのは、ゴミだった。